
under the blue sky

尾崎舞太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

u n d e r t h e b l u e s k y

【Nコード】

N 5 3 0 5 A

【作者名】

尾崎舞太

【あらすじ】

適応出来ないからこそ演じる。ずっと演じ続ける。観客も自分すらも騙し続ける。でも、彼女はそれが出来なかった。

エピローグ・上

ビデオカメラをテレビに接続する。そして、再生ボタンを押す。それだけで、彼女は再び僕の目の前に現れた。

「この映像を観ているという事は、私はもうあなたの前にはいないという事だね」

テレビに映し出された彼女は開口一番にそう言い放った。それから少しだけ恥ずかしそうに黙りこくっていた。

「……あつ、ああ。ここは私がよく好んで来た所」

彼女は画面に近づき、カメラを持ち上げて周りの風景を僕に見せる。とても青く、澄んだ空。ここは学校の屋上だ。

「知ってるよね。よくここで話したんだから。変だなあ……言いたい事がいっぱいあるのに、いざとなると何を話せばいいのか分からないや」

画面には相変わらずの青空。そして、その風景に響く彼女の震える声。

「泣いてるのかよ」

僕は呟く。

「あつ、そうだ。滝川君に勧められたダンテの神曲。全部読んだよ。読み終えたのは昨日。勧められてから結構経ったね。うん、でも凄いや、滝川君は。あれを三日で読んだんでしょ？それに内容だつて深く理解してたみたいだし。あはは……私は全然理解出来なかったよ。でも……最後まで読めて良かった。うん、本当に良かった」

そう言った彼女の声は本当に晴々しかった。もう声には震えは混じっていないかった。

「……ふう。結局……ううん。何でもない。……ごめん。何を言えるのか分からないや。もう終わるね。ただね、最後に一つだけ伝えたい事があるんだ。私ね、もしかしたら滝川君の事が　好きだったのかもしれない」

そこで映像は終わった。青空が灰色の砂嵐に変わった。

何だって？君の事が好きだったのかもしれない？そんな……
自分の好意くらい、自分の口で言えよ。今更過ぎるんだよ。バカ……
…バカ風！

僕は喧しい音を立てるテレビの前から動けずにいた。ただ、ずっと座っていた。

『君の事が　好きだったのかもしれない』

その言葉が頭の中で繰り返される。頭では足らず、遂に口にしてしまう。

「君の事が好きだったのかもしれない」

喉が鳴った。うまく息をする事が出来ない。目の奥も何だか熱い。胸が痛い。

ああ、僕は泣いているのか。

僕はテレビの前で泣き続けていた。

震える手で用紙を受け取る。心なしか用紙が重い気がする。でも、そんなのは気のせいだ。これは用紙だ。ただの用紙だ。こんな紙切れに何を恐れているのだろう。

「……ちっ」

軽く舌打ちしてから、僕はその用紙を裏返す。正確には表面にする。そこに書かれていたのは、赤いインクで『0』の文字。

「うわあああああ！」

叫ぶと教室にいたみんながドツと笑い始めた。

「笑い事じゃねーって！」

紙切れ……零点のテスト用紙を片手でヒラヒラさせながら弁解を試みるが、無駄。

「滝川、お前ってバカな！」

「今時、零点なんて流行らないぜ！」

そんな言葉が飛んで、更に笑いを促進させる。みんなこんなに笑うって事は、もしかすると、これはそんなに大変な事ではないのかもしれない。実は、大した問題なんか孕んでいないのかもしれない。「……そ、そうだよな。今時、零点なんて流行らないよな！はははっ！」

笑ってみるが、後ろから先生に小突かれて少し涙が出た。校内暴力反対。

結局、零点という珍しい得点を取った僕は、高校二年生をやり直すか、一週間補習に出続けるかという実質一つしかない選択肢を突きつけられ、みんなが帰った教室の中で一人机に向かった。

「はあ………何で零点なんだよ。僕には青い猫型ロボットでも必要って事なのか？」

ブツブツと自分の馬鹿さ加減に呆れながら補習のプリントの問題を解いていく。思ったより解けるので、自分はまだ大丈夫なのだと思うた矢先、いきなり現れた人物によって頭を叩かれる。

「本当にバカね。おばさんが泣くよ?」

叩かれた後頭部をさすりながら、僕は振り向く。そこにいたのは麻上藤花。僕の幼なじみである。

「まあ、ある意味天才だろ?」

僕は肩を竦め、戯けてみせる。藤花は実に嫌な笑みを浮かべながら、「じゃ、久郎は零点を取るくらいの天才です。可愛がつてあげてくださいっておばさんに言つてあげようか?」と僕を脅す。勘弁してください。

「分かったよ。何が目的だ?」

自分の財布具合を気にしながらも、藤花に尋ねる。藤花は「分かつてるじゃん」みたいな顔をする。

「駅前に美味しそうなクレープ屋が出来たんだ。奢つてよ」

藤花は目を輝かす。こいつは本当に甘い物が好きだ。ケーキとかパフェとかクレープとか。ぶつちゃけ、どれも同じ味にしか僕は感じない。

「分かったよ。クレープくらいなら」

藤花は満足したように僕の前の席に座つて、こちらに向き直る。

「もう少して終わる」と言つて、僕は残りの問題に手を付ける。

教室は茜色に染まり、外からは部活動に勤しんでいる生徒の元気な掛け声が聞こえる。遠くから吹奏楽部が奏でる、優しいようなメロディーの音楽が聞こえる。

チラッと藤花の顔を見る。藤花は口元に微かに笑みを作つて、僕の事を見ていた。そして、それを可愛いと僕は思ってしまった。

「……久郎」

普段とは違う声質。何処か甘えているような声。何処か大人びている声。幼なじみではなく、異性として意識させるような声。

気恥ずかしくなつて、視線を藤花からプリントへと移す。瞬間、

目に飛び込んできたのは藤花のふくよか胸。あくまで上品に短くさ
れているスカートからソツと出ている白く、細い太もも。

胸が高鳴る。体中が熱くなる。下半身が疼く。

「……いや、む、難しいな。やっぱ時間が掛かるかもしれないです。
先に行つて良いぜよ?」

藤花の顔を見ないように、なるべく冷静に言おうとするが、最後
の語尾がおかしい。どう考えても、僕は混乱している。

冷静になれ。藤花だぞ。こいつが小さい時から知っているんだぞ。
いわば、兄妹みたいなもんだぞ。そんな奴に何を緊張する必要がある?
そうそう、緊張する必要はない。藤花は女だけど、僕にとっては
そんな存在じゃない。

自分に言い聞かせる。だが、鼓動は止む事はない。下半身だつて
もう爆発寸前だ。

視線を少しだけ上げ、藤花の顔を盗み見ようとするが、白い首も
とを見たら、もうダメだった。

「……藤花」

僕は覚悟を決め、藤花の顔を見る。藤花の顔はほんのりと紅潮し
ていて、それがどうしようもなく色っぽく見えてしまった。

「久郎……」

唾を飲み込むと、凄い音が教室内に響いた気がした。そして、そ
の音がとても淫靡に感じた。

どちらからともなく、顔を近づけていく。藤花のピンク色の唇が
僕の理性を奪っていく。

もう止められない。

藤花の顔が止まった。もう瞳は閉じられている。後は僕が顔を、
唇を近づけるだけ

その時だった。

僕の視界に彼女が映った。藤花の後ろ、黒板の前を彼女が歩いて
いた。

「三枝……凧」

僕がそつ口になると、藤花がハッとなって目を開け、僕の視線を追って、三枝凧を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5305a/>

under the blue sky

2010年10月17日04時02分発行